

1960年代後半から1970年代前半にかけて この時代がどうやら私にとっての俗に言う青春期にあたるようです。高校を卒業してから何としても働きたくなかった私はたった一校受けさせてもらった大学を見事に滑り、高田馬場のとある専門学校の学生となります。なおかつお金もないくせに上石神井の漫画の学校に通っちゃう。まあ、学校って言っても名ばかりの漫画好きが集まっておしゃべりするような場だったんですが。一応残念ながら月謝ってものもあったんじゃないかなあ。ここには下は高校生、上は30過ぎくらいの雑多な年齢の人たちがいて、地方から出てきて一人暮らしの人も多かったしで、とにかくよく飲みました。「あしたのジョー」の力石が死んだといっちは飲み、もとやまれいこの15 オデビューに驚いて飲み・・・。「ねじ式」の登場にはみな呆然とし開いた口にレッドやホワイトを流し込みました。大学生が漫画を電車の中で堂々と読むことが話題になり、たかが漫画、されど漫画というわけでひとつの作品を夜を徹して語り合ったりしたものです。もちろん一杯飲みながら。オタクなんて言葉の登場する以前の、暗いことが暗いこととして受け入れられた時代、80年代以降の明るくなくちゃ人間じゃない的風潮が起こる前の良き時代だったと思います。

そんなころ高田馬場に通学していた私の遊び場所は必然的に新宿なんぞが多くなります。高田馬場～新宿間を歩き喫茶店代を工面してたった一杯のコーヒーで粘る。学生連中はみなお金がなくそんな輩がたくさんいました。そんな時代の新宿の喫茶店を中心に書かれた「琥珀色の記憶 - 時代を彩った喫茶店」(奥原哲志著・河出書房刊)。この年になってあのころ通り詰めた喫茶店たちの写真が見れることに少し感動など致しました。

新宿といえば、その時代の最先端の文化を生み出し、演劇関係者、フーテン、学生運動家といった時代の象徴的な若者が集ったと言われる「風月堂」。その独特の雰囲気は何の思想も持たないただの漫画好きっていう私は目一杯気後れしていましたが、天井が高く二階まで吹き抜けとなっている広く開放的な作りがとても好きでした。壁面を背にして横並びの席の配置が隣り合わせた見知らぬ者同士の会話をはずませたりもしました。私たちはこのお店で煙草を吸ってる人の大半が実は大麻を吸ってるんだ、なんてけっこう本気で思ったりもしてました。子供だったのね～。



ところでなんといっても当時の喫茶店の主役はジャズ喫茶。薄暗い路地に並んだジャズ喫茶の重い扉を開くと溢れ出てくる音楽。狭い階段。タバコの煙。声を落としてボソボソ話す学生たち。右写真はどこにあったかは忘れてしまいましたが（現アルタ、当時の二幸の裏あたりでしょうか）ジャズ喫茶「DIG」の店内。嵐山光三郎氏は左側前から二番目は自分じゃないかと新聞の本の紹介欄に書いていましたが、実は私も左側前から三番目の頬杖をついているのは30年前の自分ではないかと思いました。そういうふう一枚の写真の中に自分を見つける人たちがきっとたくさんいるんだろうなあ。DIGの常連さんを友人が好きになって



しまい、彼がいるか店内を見てきたり、外で出待ちに付き合ったり。雨の日にDIGの階段下でずっと待ってたんだよね。自分の色恋話でないのが残念な気がするけど。なぜもつとこのころいろいろな人を好きにならなかったのか、少し後悔です。



こちらのお店は「DUG」。「DIG」の姉妹店なんて言ってたけど本当のところは知りません。「DIG」がちょっとおしゃべりしていても怒られるのに対して、こちらは割りと自由に話せた記憶が。音楽雑誌を読んでいたときに、デビュー前の桜井君がレコード会社の人と契約の話に使ったのが、このお店だったとか。推測するに少なく

とも1989年まで「DUG」は新宿に存在し、トイズファクトリーのお偉いさんは新宿ジャズ喫茶世代だったんでしょう。

一番よく通った「ビレッジゲイト」。古い時計が狭い階段を飾っていた「木馬」。古い日本家屋をそのまま使ったような「青蛾」。数々の名曲喫茶「らんぶる」「スカラ座」・・・。

1960年代後半から70年代、新宿、ジャズ喫茶、名曲喫茶。告白すれば、ジャズ喫茶通いはしていても実はジャズなんてたいして好きじゃなかった。お店の持つ雰囲気や、友人たちとの真剣なおしゃべり、他愛ないおしゃべり、ジャズが好きだったらいいなというあこがれ、そんなものがあっただけなのだと思う。それでもそこにはホロ苦い青春の香りなんかが残ってるような気がする。

そんなころと同時代、ビッグコミックから生まれた楳図かずおの名作短編集が最近復刊された。前に紹介した「イアラ」を本編とするなら、こちらは「イアラ」というタイトルを冠した番外編。グリコちゃんから復刊の報を聞き、一目散で買ってきました。これよ、これが読みたかったの。

「イアラ短編集」1～3巻。

面白い。今私たちが生きていると思っているこの場所は果たして夢なのか現実なのか。今こうやってパソコン打って読書リスト作っている、これが夢じゃないなんてどこに確証があるんだろうか。「時間とは感覚にすぎない。生きたということは単なる記憶にすぎない」。映画「ブレッドランナー」では自分の過去が他の誰かの借り物の記憶だと知ってレプリカントのレイチェルは涙を流したっけ。でも人間だって同じようなものだとかあの時ハリソン・フォードは言うんじゃないかな。私の風月堂やDIGの記憶がそうでないって保証もないわけだし。ある日見た夢の世界に入り込んでる



のに気がつかずに毎日を過ごしてるのかもしれないし。奇蹟は明日私の目の前に現れるかもしれないし…。ジャズ喫茶はその70年代という時代を背負っているように、その時代に起きた出来事 - 東大紛争、よど号、浅間山荘 - などとイメージがオーバーラップする。楳図漫画はどの時代に読んでも変わらない。ジャズ喫茶が時代の中のひとつの風俗であったのに対し、楳図漫画はもっと個人的な、そして明日世界がどう変わるかわからない感覚を持っていたと思う。村上春樹は私と同じ70年代にその青春を過ごし、桜井君は70年に生まれる。そして今は2002年。時間は確実に流れているように見える。まあ今は真面目に読書リスト作りをしようかな。こりゃあ南極の氷も溶け出すよねってくらい暑いけど、一応ここが私の住んでる世界みたいだし。さて今月はどの位本を読めるかなあ？

作品名	作家名	感想	評価
夜のくもざる	村上春樹 絵・ 安西水丸 平凡社	村上朝日堂超短編小説。「なぜホルン吹きはホルンを吹くことを職業にしたのか？それはなぜチューバでなくホルンでなければならなかったのか？」ほんとに不思議。ホルンじゃなくちゃいけないのは、錯覚なのか、運命なのか。	
中国行きのスロウ・ポート	村上春樹 中公文庫	1980年～82年にかけて発表された七つの短編を収録。村上春樹の処女短編集。登場人物たちは生まれながらに重荷を背負っているように悲しくけだるい。	
橋	平野暉雄 光村推古書院	トマソン隊もこんなふうにいる取材旅行に行きたいね。それにはまずライ隊員がもっと元気にならなくちゃね。うさおが作者さんから贈られた謹呈本。サイン入り。	
橋の探見録 2	小橋健一 写真集 遊人工房	21世紀に受け継がれる橋 この本もうさおが懇意にしているノンフィクション作家さんからのいただきもの。の本と装丁といい、テーマといいそっくり。不思議。	
東京喫茶店(カフェ)案内	沼田元気 ギャップ出版	雑誌「東京人」の連載をまとめたもの。銀座とか中央線界隈が多く、残念ながら私が遊んだ渋谷、新宿はあまり載ってない。行ったことのある喫茶店は有楽町「日比谷」、中野「クラシック」の二軒。確か「クラシック」は今でも営業してるはず。お茶飲みに行きたい。	
東京人	雑誌 都市出版	特集「たてももの東京昭和史 ここでは歴史が動いた」。防衛庁市ヶ谷記念館は平日は見学ツアーがあるみたい。行きたい。小特集「赤羽・王子」。	
大いなる遺産	三橋美千子 ブラザー出版	著者は友人のいとこさんです。地元の東海愛知新聞に連載されていた自伝的エッセイ。波乱万丈の生涯を強くたくましく乗り越えていく。友人も私も全然こんなふうじゃないな。すごい。	
COMAGOMA(コマゴマ)1~巻	森下裕美 集英社	「少年アシベ」続編。な、なんと、多摩川から鶴見川までやってきたのはアゴヒゲアザラシのタマちゃん。アシベんちにいるのはゴマアザラシのゴマちゃん。アイスクリームが大好き。	「少年アシベ」は5だよ(^.^)